

保育者と保護者の感じあい・伝えあい

— 事例にみる好ましい語りかけ —

○豊永家壽子(別府大学短期大学部)

三池裕子(久留米信愛女学院短期大学)

原田康子(和泉短期大学)

坂口りつ子(西南学院大学)

I. はじめに

乳幼児を保育所や幼稚園に入園させている保護者は保育者を信頼し、園生活を通して子どもが成長していくことを期待している。中には子育てに無関心で園任せの人もいるし、園や保育者に不満を持つ人もいる。しかし、大部分の保護者は、保育者から知らされるわが子の園生活での変化や育ちに喜びを感じ、自分の子育てについての反省の機会ともしている。

保護者の心を動かす保育者の語りかけが好ましいものであれば、子育てへの希望や意欲を抱くことができる。一方、保育者の不用意なひとことが保護者の心を傷つけ、子どもを巻き込んでしまうこともある。

今日、核家族化が進み、子育ての具体的、直接的な情報や実際の援助が乏しい保護者を、精神的に支えていく役割の一端を保育者が担っているといえる。両者が連携を図り、園と家庭の生活がスムーズに流れていく中で、個々の子どもが健やかに発達を遂げるように援助すべきであると考えている。

そこで本研究は、保護者が保育者からの語りかけをどのように受けとめ、また、何を期待しているのか、その率直な声を集約して、広く保育者養成に役立てることを目的とした。

II. 調査方法

調査方法は、聴き取り調査およびアンケートによる調査(園の職員を通さず直接回収)で、保育者の語りかけをプラス思考で受けとめた事例を中心に、園および保育者への具体的な要望もあわせ集約した。

調査対象は、東京都・神奈川県・千葉県・福岡県・大分県の保育所・幼稚園児約70名の保護者を対象に行ない、80余の事例が寄せられた。

調査時期は、1996年10月～12月である。

調査内容を、子ども・保育者・保護者の三つに分類して考察したが、これらは相互に関連している。

III. 結果と考察

本研究の目的にしたがい、主な事例を取り上げ、会話を「」、感想等を()、考察を< >とする。

(1) 子ども自身の発達・友達との育ちあい

事例① “オムツ取り”(1歳) 「きょう初めてオマ

ルにおしっこが出ました。そのおしっこを持って帰りたいくらい嬉しかったです」(毎日きまった時刻にオマルに座らせて、オムツ取りに協力して下さった)

<保育者の感じ方に保護者が感動し、信頼感が増す>

事例② “頭にこぶ”(2歳) 「手当てをしたので大丈夫と思いますが、お家でも様子を見てください。すみませんでした」(その夜「〇ちゃんいかがでしょうか。大丈夫ですか」と電話があった)

<保育者の責任感に、保護者も保育者を気遣う>

事例③ “もう△歳・まだ△歳”(3歳) 担任は「本の読み聞かせの時も一人だけ座っていないで、ふらふらと歩き回って落ち着きがない」。別の保育者は「もう△歳になったから、あれもこれもしてほしい、できてほしい。他の子と同じように…とばかり考えてはダメですよ。まだ△歳だからと考えることも大切です」

<子どもの現象をもう△歳とみるか、まだ△歳とみるかによって、保育者の子どもへの接し方が変化する>

事例④ “障害児とのふれあい”(5歳) 園で、障害のある子どもの世話を、周りの子どもたちが自然の姿でやっている機会に出会い、何度となくとても嬉しく思った。同じ仲間として生活する、そういう教育を取り入れて下さった保育所に感謝している。

<個人差の著しい乳幼児期は、発達に応じた援助とともに、子ども同士が育ちあう環境が必要である>

(2) 保育者の人間性・専門性

事例① “うんちの始末”(2歳) まだ一人では上手にできない。帰宅後脱いだパンツを見ると、うんちがついていた。「どうしたの」「自分で拭いた」「どうして先生に拭いてもらわなかったの」「あのね、先生に『拭いて』って言ったの。そしたら『もう!!』って言ったから、自分で拭いた」(子どもなりに保育者に気をつかっているのだなあとと思った)

<保育者の子どもの発達への理解不足と無神経な言葉は、子どもの心を傷つけ、信頼感が薄れる>

事例② “どろんこ遊び”(3歳) 病気がちで外遊びの経験が少なく、素足で地面に立つことさえできなかった子どもが、半年後にどろんこ遊びができるようになった。その様子を写真に撮り、贈って下さった。

<友達のどろんこ遊びに興味を示した時を見逃さずに共に遊びながら、継続した援助を行なうことで子ども

が伸び、保護者との共感が得られる>

事例③ “ハーモニカ” (4歳) 演奏会の前に保育者が「○ちゃんのハーモニカ特別なものにしてあげるね」と、セロテープで巻いたハーモニカを子どもに渡した。帰宅して「お母さん、どうして僕だけ特別なの」と聞く。(何も答えられず、園を変える決心をした)

<保育者は会の成功を目ざし、評価を気にするあまり子どもの気持ちを汲み取らず、プライドを傷つける>

事例④ “子どもが見えない” (4歳) 「園ではどんなでしょうか」「これとって問題はありますか」「どんな遊びをしていますか」「今日は折紙で遊んでいました」(尋ねなければ何も言わない)

<園での様子を知りたいという保護者の願いに応えることによって、保護者の安心感や信頼感が増す>

事例⑤ “かけっこ” (5歳) かけっこの練習でいつも一番になれない。運動会当日、保育者は子どもの肩をポンとたたき「今日は本気で走ってごらん!」。子どもは用意・ドンで一番に飛び出した。結果は二番だったが、本人は一生懸命走ったことに満足した。

<運動会という大きな行事の中で、一人の子どもの心の動きに気づいた保育者の温かいかわりで、子どもが励まされ、これを機会に信頼関係も深まる>

(3) 保護者の子育て支援・家庭との連携

事例① “どうぞお仕事に” (6か月) 登園してすぐうんちを始めた。終りを待つ始末してと思っていると「お母さん、後は私がしますから、どうぞお仕事に行ってください」「でもうんちの始末が…」「朝からうんちなんて、とても気持ちいいじゃないですか。元気なうんち見るの私大好きです。だから、どうぞ気にしないで早くいらして!」(恐縮しつつも、若い保育者の声を爽やかに、嬉しく受けとめた)

<遅刻させまいとの温かい対応、ここに日頃の子どもへの愛情も感じられ、両者のよい関係がみられる>

事例② “連絡帳・降園時のひとこと”

☆「今日○ちゃんから、お父さんとお母さんの…の話を聞きました。とっても楽しかったです。○ちゃんありがとうございます」(この保育者は、日頃子どもから喜びをもらって嬉しいという表現が多い。またさりげなく自分の子育て経験・失敗例も一語して下さる)

<喜びの共有、子育てを担いあっていると実感する>

☆「お母さんお帰りなさい。お疲れ様でした。○ちゃん元気でよく遊びましたよ」(一泊の出張帰りでお迎えの時、いたわりの言葉をかけていただいた)

<留守中の心配も疲れもとれ、思いを受けとめてくれる優しい言葉に、保育者との距離感の変化を感じる>

IV. 要約

この調査から、保護者が求めているものは、極めて具体的な園生活での情報であることが明確になった。

保育者が子どもの発達のみちすじをおさえ、園生活にみる子どもの育ちを伝えたり、自己の保育体験を交えて語る中で保護者が励まされ、両者の信頼関係が得られる。そこに子育てを共有する一体感も生まれ、保護者の心が開かれていく。このことが、保育者と子どもとの良好な関係を築くことにもなる。

したがって、保育者養成の中で、専門的な知識・技術はもとより、保育の心をいかにして育てていくのが問われるところである。

まず、保育の原点に戻り、子ども・保育者・保護者をもっと素朴に感じあい、お互いの成長が期待されるような人間関係を築いていくことが大切である。

V. おわりに

本調査を総括し、今後の方策を次のように考える。

保護者が知り得ないその日の子どものつぶやきや行動、友達とのふれあいなどを、連絡帳を通して、あるいは送迎時のさりげないひとことで伝える。言葉に表情と心をこめて、子どもの具体的場面と状態を伝えることで、保護者は一日の疲れを忘れ、家庭と仕事の両立への意欲をかきたてられる。

このように、子育ての共有・支援は、日常生活の中のささやかな言葉のやりとりや感じあいによって達成されていくことに留意して、学生指導にあたりたい。

しかし、保育者を養成する立場にある私たちは、学生の生活とどうかかわり、そこに何が見えているのだろうか。どのような温かい励ましや称賛を行い、あるいは嘆き悲しみを共感しているのだろうか。日常的な学生指導が省みられるところである。

今後の課題として、まず、私たちは学生一人ひとりにかかわりを持つ工夫をし、様々な場面・機会をとらえて、学生が主体的に課題を見つけ、判断する問題解決能力を培うよう個別指導を行なっていく。

次に、学生自身の人間性と保育者としての専門性を高めるためには、特に異世代の人々との交流の必要性を、具体的な事例をあげて説くと同時に、学生自らもそれが実感できる機会・場を、実習以外にも積極的に提供することが必要であると考え、これを実践に移していきたい。

本調査にご協力いただいた各園の保護者の皆様に、心から感謝いたします。